

学校サポートプログラム活用事例集

—学校の課題に対応する、小学校におけるソーシャルスキル、 中学校におけるピア・サポートを中心とした実践事例—

教育相談センター 学級経営研究ユニット

塚田 孝子 坪川 美穂 甚佐 奈央

福井県の教師の学級経営力向上に資することを目的として、教育相談部（現教育相談センター）研究ユニットでは、平成 26 年度から 3 年間かけて、「学級への適応感と学力との関連」に関する調査研究と、良好な学級集団を作るために有効な実践プログラムを小学校と中学校においてそれぞれ作成するための実践研究を行い、小学校のソーシャルスキル教育を柱としたプログラムと中学校のピア・サポート活動を柱としたプログラムからなる「福井県版学級経営プログラム」を完成させた。このプログラムは、いじめや不登校を未然に防ぐために児童・生徒の学級への適応感を高め、学力向上にもつなげることを検証するための実践研究によって作成されたものである。今年度は、学校支援、教師支援を実効性のあるものにしていくことを目的として、学校の課題に対応するために本プログラムを活用したいとの申し込みがあった県内の小・中学校において、本プログラムを活用した実践研究を行った。

〈キーワード〉 ソーシャルスキル、ピア・サポート、若手教員育成、人間関係づくり、行事との関連

I 主題設定の理由

今日、学校では、社会の急速な変化に伴い、従来の枠ではとらえきれない新しい複雑な課題が生じてきている。また、児童・生徒を取り巻く変化も大きく、これまで有効だった教師の経験や勘が通用しなくなっている。さらに、アクティブ・ラーニングを取り入れ、主体的・対話的で深い学びを可能としていく良好な学級集団を作るための教師の力量が求められている。教師集団の年齢構成の変化が目前に迫っている中、教師一人ひとりが力量を向上させる必要に迫られている。そのためには、良質な研修による教師の力量形成が不可欠である。しかしながら、学校現場においては「多忙化」のため、教師が数々の課題に対応するために十分な研修を受けることが難しい状況である。

そこで、平成 28 年度から研究協力校での実践研究と並行して、県内の小・中学校に「突破力育成！学校サポートプログラム」として、「福井県版学級経営プログラム」を提供することにした。嶺北の小・中学校に希望する学校を募ったところ、小学校 8 校と中学校 5 校から申し込みがあり、小中それぞれ 2 校を月 1 回訪問する実践校、そのほかの学校を学校の希望に応じて学期に数回訪問するサポート校として実践研究を行った。これらの実践研究の考察では、「継続すること」「実践と省察を繰り返すこと」の重要性が繰り返し指摘された。このことを受け、次年度からは、本プログラムをブラッシュアップしてくことと並行して、実践と省察を繰り返し、継続性のある形で学校支援、教師支援を行っていくことと、そのことを通して学校の自己解決力を育む支援を行っていくことを教育相談センターの大きな方向性とした。その実践の蓄積の先に、本プログラムをさまざまな学級集団に応じて有効に機能させるための、言わば「プログラム活用編」に関する知見が蓄積されていくと考えたからである。

そこで、平成 29 年度は実践事例集作成初年度として、実践校を 4 校にして希望する学校を募集したところ、小学校 15 校と中学校 10 校から申し込みがあった。教育相談センターで申し込みのあった学校から希望する支援内容等の聞き取りを行った上で小・中学校それぞれの実践校を 4 校決定し、それ以外

の学校はサポート校として訪問することにした。申し込みの際の学校の課題は様々であり、学校の実態に応じたプログラムを有効に活用していくにはどうしていったらよいかということ、それぞれの学校の教員と所員が検討を重ねながら実践を積み上げていった。学校の課題に応じた「学校サポートプログラム」の活用ということで、今年度は実践した小学校での3事例と中学校での7事例を活用事例として記述する。今年度は、研究ユニットの2名の所員は実践初年度ということ、事例集作成も初年度ということで、本研究は学校の課題解決につながる有効な支援をしていくために本プログラムをどのように活用していったらよいかを試行錯誤しながら実践していったものであり、それぞれの実践の効果の検証については、学校が実施している検査（Q-Uやアセス）や教員へのアンケート調査で行ったが、統計上の処理はしておらず、関連を調べたものであることを言及しておく。

II 各研究の方法と結果及び考察

1 良好な人間関係を築くための高学年での取り組みとして（小学校）

(1) 事例校について

児童数約200名。1学年は1～2学級、特別支援学級2学級の小学校である。若手教員が半数以上を占めるということで、若手の学級経営力向上を目指している。また、研究主任を中心として全ての学級でソーシャルスキルトレーニング（以下、SSTとする）を実践していきたいという思いがあり、今年度、実践校として月1回、低学年・中学年・高学年の3学年3学級に入って授業実践を行うことになった。3学年で実践を行ったが、ここでは、高学年での取り組みについて記述する。

(2) 事例校の課題

学校全体として、自分の考えをはっきり主張したり、特定の児童に対しての言動を考えたりしながら、望ましい学習環境をつくりたいという思いがあった。そこで、安心・安全な学級づくりを基本に、言葉による望ましいコミュニケーション力を身につけた児童の育成、児童同士がお互いの個性を尊重し、切磋琢磨し合おうとする集団づくりのためにSSTを実践していくことになった。

(3) 実践の概要

学級担任3人と打合せをして、年間計画を立てた。初めての取り組みということで研究所が提案している小学校版学級経営プログラムに沿って、月1回のSSTの授業を実践していくことになった。内容や目的を変えることはしなかったが、それぞれの発達段階に応じて発問の仕方を変えたり、内容を工夫したり、方法を変えて実践を行った。

① 月1回のSSTの授業実践

4月から実践したSSTの内容と目的は以下のようになっている。

表1 実施した実践案

回数	内容	目的
1	上手な聴き方 ¹	<ul style="list-style-type: none"> 人の話に注意深く耳を傾ける大切さに気づく。 話を聴いてもらう気持ちよさを体験する。
2	あたたかい言葉がけ「誘う編」	<ul style="list-style-type: none"> 人は、いろいろな感情を持っていることを知る。 相手の感情に気づき、理解する方法を身につける。
3	よいところさがし	<ul style="list-style-type: none"> 友達の良いところを言葉にする練習として、キャラクターの良いところ見つけをする。 友達の良さを伝える。
4	相手の気持ちを考えた言葉がけ	<ul style="list-style-type: none"> あたたかい言葉とは何かを知る。 あたたかい言葉をかけられる体験を通して、そのよさを

		味わう。
5	上手な聴き方 ²	・話を聴いてもらう気持ちよさを体験する。
6	あたたかい言葉がけ「褒める編」	・相手の気持ちを考えながら言葉をかける技術を身につける。 ・温かい言葉を実際に言う練習をする。
7	気持ちを周りの人に伝えよう	・+の気持ちを表す言葉と-の気持ちを表す言葉があることを知る。 ・気持ちすごろくを通して、感情を伝える技法を身につける。
8	力を合わせて	・課題を解決するために、グループの仲間とルールを守りながら話し合いを行う。
9	上手な断り方	・相手の気持ちや立場を大切にしつつ、自分の考えや思いを相手にはっきりと伝えることの大切さを学ぶ。

② 児童理解のための現職教育

年度初めの打合せで研究所が紹介した学校適応感尺度（以下、アセスとする）を5月と11月に3年生以上の学年で実施し、児童の学校適応感を測定した。6月には「アセスを使った児童理解」というテーマで「アセスの使い方と活かし方」に関する現職教育を行った。その際、5月に実施したアセスの結果を持ち寄り、児童の様子と担任の捉えている児童の様子に違いはないか教員同士での意見交換の時間も作った。1月にも2回目のアセスの結果をもとに、担任との個別相談を行った。1回目の結果と比較し、学級や児童個人にどのような変化があったのか、特に、学校適応感の低い児童や気がかりな児童について、どのようなことがきっかけで、どのような変化があったのか、今後の支援方策について話し合った。

③ 高学年での取組み

高学年では、思春期特有の異性間、同性間などの人間関係におけるトラブルや悪い方、楽な方に追従してしまうといった問題が起こりがちである。そのため、未然防止として、授業時間を使わなくても短い時間で取り入れることができる「ほめほめシャワー」や「秘密の友達」などの活動案を紹介した。紹介したものを参考にして、独自の取組みをしていた。

④ 人権教育週間での取組み

12月の人権教育週間にSSTを取り入れた活動を全校で行いたいという相談があり、全校で取り組める活動案を紹介した。「秘密の友達」を実践校なりにアレンジした「ハートフルツリー」に取り組み、学級ごとに友達のよいところを発表し合い、コメントを書いた付箋を教室前の廊下に掲示した。また、学級に関係なく、よいところ、してもらってうれしかったことなどを付箋に書いて児童玄関に掲示し、担当教員が全校集会で紹介するなどして、全校で認め合うことができるようにした。担任からは「ふだん、あまり感情を表に出さない児童も友達に認められて嬉しそうにしていた」「表面的な部分だけでなく、内面の良さを認める児童も出てきた」といった感想が聞かれた。



図1 ハートフルツリー

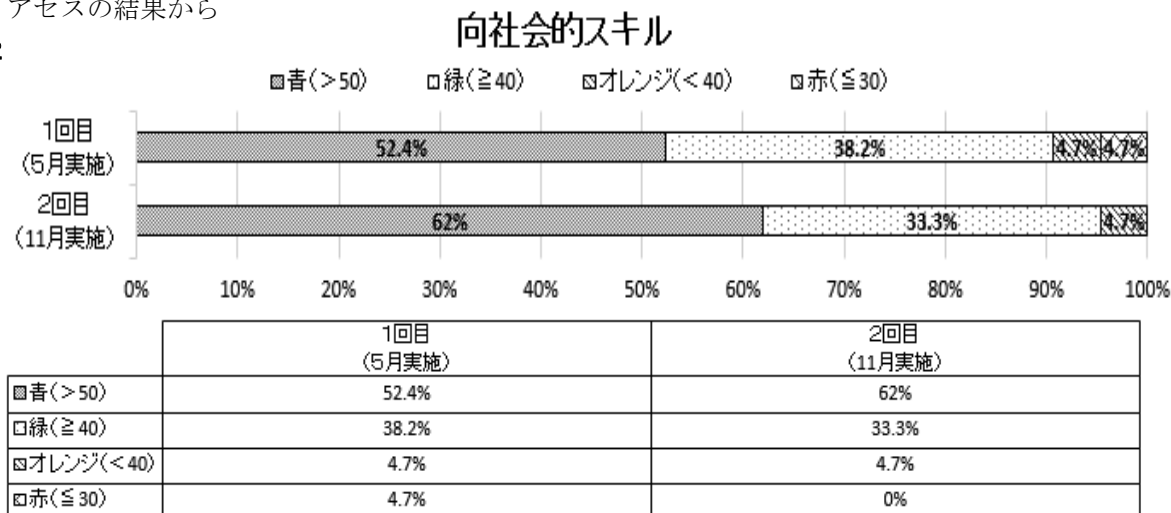
(4) 結果

実践校では、実施後すぐに結果がわかるという点、相関関係をもとに個別の支援計画が立てやすいという点から、アセスを実施した。アセスは「友人サポート」や「教師サポート」など6つの側面から学校適応感をとらえることができるものである。本実践では、児童同士の関係をつくるスキルを測

る尺度として、「向社会的スキル」の結果の変化をみた。

① アセスの結果から

表 2



② 授業後の振り返りカードから

ア 5月「あたたかい言葉がけ（誘う編）」

- ・教えてもらったことを使いたいです。
- ・少し恥ずかしかったけど、ちゃんと言えて良かった。

イ 10月「あたたかい言葉がけ（褒める編）」

- ・温かい言葉を使って、ほかの人を喜ばせたいです。
- ・自分のことだけでなく、友達がうれしいと思う言葉を言いたいです。

ウ 1月「上手な断り方」

- ・習ったことをいかして、自分も相手も納得できるようにしたいです。
- ・教えてもらったことを上手く使って、友達となかよくしたいです。

(5) 考察

アセスの6因子のうち、友達への援助や友達との関係をつくるスキルをもっていると感じている程度を示す「向社会的スキル」の結果で効果の検証を行った。60%を超えると学級集団としては満足した状態であるとされる青 (>偏差値 50) の割合が 11 月には 62% になった。また、早急な支援が必要とされる赤 (<偏差値 30) の割合が 5 月には 4.7% あったが、11 月には 0% になった。(表 2) このことから、子どもたちの学校適応感がより高まったとみることができる。振り返りカードの感想では、最初のころ (5 月) は自分ができていた、できていなかったという内容の感想が多かったが、授業の回数を重ねるごとに、自分以外の人に対して、こういう行動をしたいというような感想が増えた。担任へのアンケート調査からは、「自分の思いを伝わらないからといってあきらめるのではなく、言葉で説明して分かってもらおうとする姿がみられるようになった」などの感想を得た。このことから、一定の成果をおさめることができたと考えられる。

2 人間関係が固定しがちな小規模校での取り組みとして (小学校)

(1) 事例校について

児童数約 100 名。1 学年 1 学級の小学校である。学級づくりについて学校全体で考えていきたいという思いがあり、特に若手支援ということで、若手教員の担任する 3 年生に月 1 回入り、授業実践を行うことになった。

(2) 事例校の課題

小規模校では、人間関係が固定しがちで、小学校入学以前からの関係性が卒業するまで続いていくということが多い。そのため、トラブルが起こったり、良好な関係が崩れてしまったりすると、その事に悩むという事態が起こりやすくなる。事例校としては、発言力がある児童は思ったことを言えるが、大人しい児童は自分の思いをなかなか声に出して言えないということが多かったり、何も考えずに行動をしてしまいがちな児童が多かったりする点に課題を感じ、児童同士が自分たちの発言や行動を振り返るきっかけになることを目的として SST の実践をしていくことになった。

(3) 実践の概要

① 月 1 回の SST の授業実践

本プログラムを取り入れるのが初めてということで、実践事例 1 の学校と同じプログラムを月 1 回実施した。

② 学校全体での取組み

3 年生だけでなく、ほかの学年においてもソーシャルスキルが必要である、小規模校では縦割り班活動などがあり、学校全体で SST に取り組んでいく必要があるという考えで、ほかの学年にも SST の取組みを広げていった。その支援として、10 月より対象学年を増やして、授業実践を行った。

③ 学級づくりのための現職教育

12 月には「児童理解と学級づくり」というテーマで現職教育を行った。少子化や塾通いなどで他者と関わる機会が減ってきている今の子どもたちの現状、家庭・地域の教育力が落ちている今、関わりの中でしか育たない自尊感情とソーシャルスキルを育むため、学校で SST を実施していくことが必要であるということ、学級づくりの 1 つとして、相手の考えも認めつつ、自分の意見もしっかりと伝えていけるような関係を作るために SST を実践していくことが有効であるということも伝え、教職員での共通理解を図った。

(4) 結果

実践校では、児童個人や学級集団としての状態をみるために Q-U を活用している。Q-U は、承認得点で児童の存在や行動が、友達や教師からどのように承認されているか、被侵害得点でいじめ、冷やかしなどを受けていないかを数値としてみるができる。また、プロット図で学級集団としての状態をみるができる。そこで、本実践では、Q-U の承認得点、被侵害得点、プロット図の結果で変化をみた。

① 学級状態の変化 (Q-U の結果)

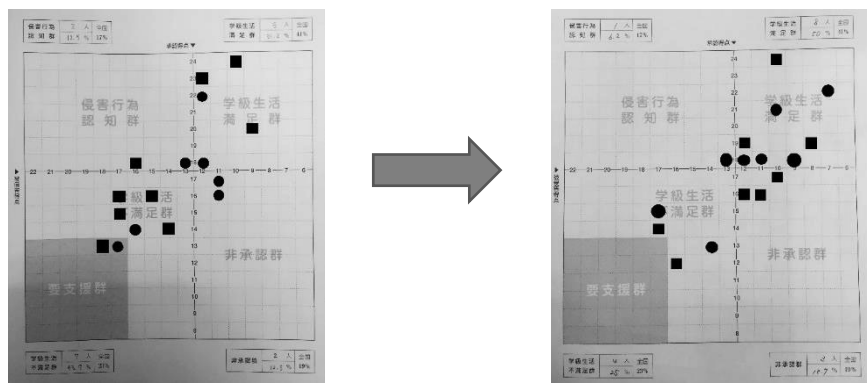
学級満足度尺度得点の変化 (下表) とプロット図の変化 (下図)

	承認得点	被侵害得点
7 月	17.3	13.5
12 月	17.5	11.8

承認得点の平均が 0.2 点上がり、被侵害得点の平均が 1.7 点下がった。

[プロット図の変化]

- : 男子
- : 女子



② 授業後の振り返り

図 2 7 月と 12 月実施の Q-U プロット図の比較

ア 9月「上手な聴き方²」

- ・うまく伝えられなくて怒ってしまったので、これからは上手に伝えるようにしたいです。
- ・相手の話の途中で質問してしまいました。あいづちも難しかったです。
- ・一人ひとり思っていることと感じていることが違うと分かりました。相手が傷つかないような言葉を使いたいです。

イ 11月「気持ちを周りの人に伝えよう」

- ・自分の気持ちはちゃんと伝えて、人の気持ちを考えることも大事だと分かりました。
- ・一人ひとり思っていることと感じていることが違うと分かりました。相手が傷つかないような言葉を使いたいです。

(5) 考察

学級満足度尺度得点の結果より、児童・生徒の存在や行動が、友達や教師から承認されていると感じている承認得点が上がリ、不適応感やいじめ、冷やかしなどを受けていると感じている被侵害得点が下がった。プロット図の結果を見ても、学級生活不満足群に入っていた児童が7人から4人に減り、特に、要支援群に入っている児童はいなくなった。学級生活満足群の割合も31.2%から50%に増え、学級の半数の児童が学級生活に満足していると答えていることが分かる。授業後の感想でも、自分の気持ちをちゃんと伝えることの必要性や人の気持ちを考えることの大切さなどに触れた感想が見られるようになった。このことから、SSTの実践をしていく中で、自分がどのように話したり、行動したりしているのか振り返られるようになってきたと考えられる。SSTの授業をきっかけとして、日々の授業でも声かけや話し合いを繰り返したり、現職教育を行い、教職員全体でSSTの必要性を考えたりした結果、他学年でも実践するようになり、全校で活動していくきっかけとなり、一定の成果を得られたと考えられる。

3 温かく豊かな人間関係を築くための学校全体での取組みとして（小学校）

(1) 事例校について

児童数約600名。1学年3学級、特別支援学級2学級の小学校である。子どもたち同士の人間関係を良くしたいという思いから、子どもたちを支援するという目的で、今年度、実践校として月1回、希望のあった低学年・中学年・高学年それぞれ1学級ずつ3学年3学級に入って授業実践を行うことになった。

(2) 事例校の課題

学級の中に、相手の気持ちを考えない言葉を言ったり、友達と協力することができない児童がいたりすると学級の雰囲気が悪くなりがちで、友人関係もぎくしゃくすることが多い。このような児童を含め、温かく豊かな人間関係を築き、学級の雰囲気を良い方向に導きたいという思いから、SSTを実践していくことになった。特別な配慮を必要とする児童、授業中の態度、人間関係におけるトラブルなど、さまざまな問題の未然防止を目的としてSSTの実践をしていくことになった。

(3) 実践の概要

① 月1回のSSTの授業実践

実践事例1と同じプログラムで実施した。この学校も低学年・中学年・高学年に授業に入ることになったので、各学年の発達段階に応じて発問の仕方や内容を工夫するなど指導方法を変えて実践を行った。所員が入る授業をほかの教員が参観し、その後それぞれの学級でも同じようにSSTを実践した。

② Q-U活用のための現職教育

夏季休業中には「Q-Uで分かる学級の“今”と“これから”～ソーシャルスキルとピア・サポートを通して～」というテーマで2時間かけて現職教育を行った。Q-Uの結果を持ち寄り、教員同士で検討

することで、学級での子どもたちの状態を理解し、ソーシャルスキルやピア・サポートなどを取り入れることによって、学級づくりにどのような効果があるのかについて演習を交えた研修を行った。夏季休業明けから、すぐに取り組めるような内容で、SSTを実践していくことの意識付けになった。

③ 家庭との連携

管理職が学校全体で取り組む必要性を感じ、学校全体で積極的にSSTに取り組んだ。

ア 学校公開日に合わせた授業

学校でやっているSSTの授業のことも知ってもらいたいという学校の思いから、学校公開日に合わせてSSTの授業「上手な聴き方」を行った。保護者に学校でやっているSSTの授業がどのようなものかを見てもらうことで、今の子どもたちに、どうしてSSTが必要なのかということやSSTの授業をすることでどのような力をつけるのかということを理解してもらおうきっかけとした。

イ 校長室だより

校長室だよりの中で学期に1回ずつSSTの取組みを伝えた。保護者の中の「SSTは、学校で教えるようなことではないのではないか」「SSTは、家庭でやることではないのか」といった疑問に対して、校長が少子化や地域・社会の変化、SNSの発達等で以前のように社会性を自然に身につける機会が少なくなっているということ、集団としての活動が可能な学校で行うからこそ意義があり、学校が社会性を身につける最後の砦であるということなどを伝えた。SSTは学校こそがやるべき場所であると家庭に知らせた



図3 校長室だより

ことで、先生方の意識が高まり、学校全体で取り組むきっかけになった。

(4) 結果

事例校では、Q-Uを活用している。本実践では、Q-Uの承認得点、被侵害得点、プロット図の結果で変化をみた。なお、全体での取り組みだが、低学年のものだけ載せる。

① 学級状態の変化(Q-Uの結果)

学級満足度尺度得点の変化(下表)とプロット図の変化(下図)

	承認得点	被侵害得点
7月	18.1	11.2
12月	18.4	11.0

承認得点の平均が0.3点上がり、被侵害得点の平均が0.2点下がった。

[プロット図の変化]

- : 男子
- : 女子

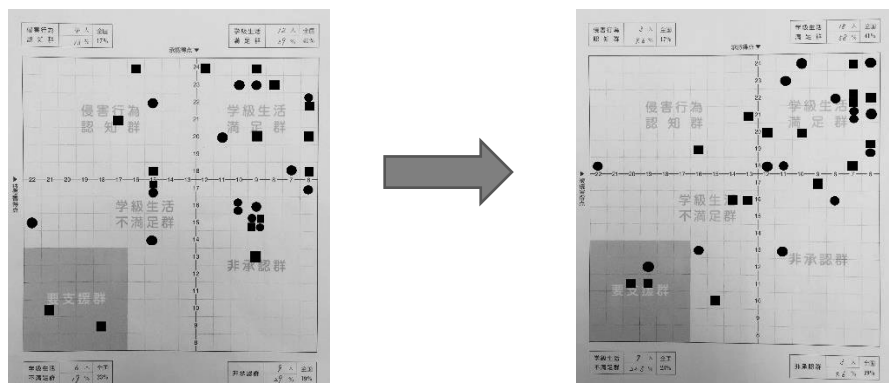


図4 7月と12月実施のQ-Uプロット図の比較

② 授業後の振り返りカードから

ア 10月「あたたかい言葉かけ（褒める編）」 低学年

- ・ふわふわ言葉をいっぱいかけることができました。先生にもかけることができました。
- ・自分の学校だけでなく、世界中にあたたかい言葉をひろめていきたいです。

イ 10月「あたたかい言葉かけ（褒める編）」 中学年

- ・あたたかい言葉をたくさん言って、みんなを笑顔にさせて、学校全体が笑顔になってほしいです。
- ・あたたかい言葉を言うときも心をこめて言った方が、相手もうれしいし、その方が相手に伝わりやすいと思います。

ウ 10月「あたたかい言葉かけ（褒める編）」 高学年

- ・相手にあたたかい言葉を言うと、言った自分も温かくなるなと思いました。
- ・自分も言われるとうれしいし、相手に言うのも相手が喜ぶから、みんなが言えるような学級にしたいです。

(5) 考察

学級満足度尺度得点の結果より、承認得点が上がリ、被侵害得点が下がった。また、プロット図の結果より、学級生活満足群の割合が、39%から58%と増えた。このような変化がみられたということは、SSTを実践後、普段の学校生活の中でも担任が継続して行ってきたため、学級の雰囲気良くなり、友達との人間関係も円滑になったと考えられる。学級集団として安心安全が根底にあることで、学校生活に満足していると感じている児童が増えたといえる。ほかの学級においても同様の変化が見られたので、一定の成果を収めたといえる。

大規模校であっても所員が授業に入ることができる学級は最大3学級ほどである。そのため、学校全体がSSTを授業に取り入れていくことは、なかなか難しい。実践校では、所員が入る授業を参観して自学級で実践していくなど、授業に入っていない学級での取り組みも積極的に行っていた。このように学校全体でSSTを進めていくことができたのも管理職自らがおたよりで地域や家庭に働きかけをしたり、教職員が必要を理解し実践していけるよう管理職が指導力を発揮したりしたからだと思われる。所員が入った学級の担任だけでなく、管理職をはじめとした教職員みんながSSTの取り組みを見学し、実践していったからこそ、学校全体での取り組みとなり、豊かな人間関係を築ききっかけの一助となったと思われる。

4 互いを認め合える関係を作る取組みとして（中学校）

(1) 事例校について

生徒数約450名、1学年5～6学級、特別支援学級2学級の中学校である。市内の5つの小学校から進学してくる。昨年度は、「学校サポートプログラム」のサポート校として2年生2学級にて授業実践を行った。今年度は、実践校として2年生2学級にて授業実践を行うこととなった。担任は2人とも若手教員である。

(2) 事例校の課題

2年生について、互いを認め合う意識を高めたいということで、「学校サポートプログラム」への申し込みがあった。担任は、互いを認め合う意識を高めることにより、女子生徒の間で起こりやすい、うわさ話やLINEなどによるトラブルを未然に防ぎたいと思っている。おとなしい生徒が多いと感じられる学年である。

(3) 実践の概要

① 月1回の授業実践

研究所が提案している中学校版学級経営プログラムを月1回実践した。授業実践の活動名とねらい

は以下のようにになっている。

表3 中学校版学級経営プログラム

回数	活動名とねらい (○)	
1	オリエンテーション 「ジョハリの窓」「みんなってすごい！自分もすごい！」 ○自己の成長のためには、自己開示と他者からのフィードバックが大切であることを学ぶ。 ○学級で多様な意見を出し合うことの大切さを知る。	
2	ピア・サポートトレーニング ¹ 「心地よい聴き方について考えよう」 ○話し手の立場に立ったよい聴き方について考える。	
3	ピア・サポートトレーニング ² 「気持ちを讀みとろう！」 ○相手の表情や口調などから、感情を讀みとれることを知る。	
4	ピア・サポートトレーニング ³ 「気持ちのよい話し方をしよう」 ○よい関係を保ちながらも、自分の気持ちや言いたいことを伝える言い方や態度があることを知る。	
5	ピア・サポートトレーニング ⁴ 「上手な断り方」 ○適切な自己表現で、友達の要求を断る方法を学ぶ。	ピア・サポートトレーニング ⁴ 「うわさ話への対処法」 ○うわさ話には、ゆがんだ情報が含まれていることを知り、うわさや第三者を評価する質問に対する応答の仕方を学ぶ。
6	ピア・サポートトレーニング ⁵ 「悪いのだ～れ」 ○SNSでのいじめについて考え、解決策を話し合う。	
7	ピア・サポートプランニング 「ピア・サポ活動をプランニングしよう」 ○自分が今できるピア・サポートの内容を考え、具体的に計画する。	
8	ピア・サポート実践 ○自分が計画したピア・サポート活動に取り組む。	
9	ピア・サポート実践の振り返り 「ピア・サポ活動を振り返ろう」 ○各自の実践を振り返り、思いやりをもった行動をとることの良さについて考える。	

(5回目は、学級の実態に合わせて選択)

② 不安抑制のためのアイスブレイクの工夫

アイスブレイクとして「餃子ジャンケン」や「エネルギー補給ゲーム」を実施した。運動は不安を抑制し、互いの肯定的な関わりが安心・安全を生むと言われている。生徒の脈拍を上げて楽しい活動をすることで、生徒の不安を抑制する工夫をした。

「餃子ジャンケン」は、3人組になり、「餃子ジャンケン、ジャンケンぽん」と言ってジャンケンをし、グー(肉)、チョキ(ニラ)、パー(皮)がそろって「いただきます！」ができるまでジャンケンをする活動である。「エネルギー補給ゲーム」は、2人組で向かい合わせになり、1から20まで数字を順番に言っていき、3の倍数と4の倍数のときに相手と手を合わせる活動である。生徒たちは「い

たきます！」をしたい、間違わずに相手と手を合わせたいと夢中で活動に取り組んでいた。活動後には、一緒に活動した友達と笑顔で言葉をかわす姿が見られた。

③ ピア・サポート活動の実践に対する動機づけ

「学校サポートプログラム」におけるピア・サポート活動の実践は、こちらから与える形になるため、生徒に実践に対する意欲をもたせるのが難しい面がある。そこで、生徒への動機づけとして、「ピア・サポ活動をプランニングしよう」の授業において、プランニングの前に、最近自分が他者にしてもらってうれしかったことや感謝したいことを振り返り、その内容を学級で共有する活動を実施した。生徒に、誰かに支えられている自分に気づき、「自分もそのようなサポートができるようになりたい」と感じさせることがねらいである。班で共有したうれしかったことや感謝したいことは、各自で実践するピア・サポート活動の内容を決定する際の参考にもなったようである。

④ 授業の振り返りとリレーション（人間関係）作りに関する助言

授業実践を行った日の放課後に2名の担任と話をする時間をとり、その日に行った授業について感想や意見を言い合い、次時の授業内容や準備物の確認を行った。女子間のトラブルなど学級での気がかりなことに関する話が出て、情報共有や相談の時間となることも多々あった。夏休みと冬休みには話合いの時間を長めに設け、5月と12月に実施されたQ-Uの結果を検討し、所員からリレーション作りに使えるミニゲームや「秘密の友達」などの活動を紹介するなどした。

⑤ 学校全体へ活動を広げる取組み

1年間の実践記録として、毎回の授業後に生徒が書いている振り返りのまとめや、各生徒が考えたピア・サポート活動の実践レポートなどをまとめた冊子を作成した。冊子は、実践学級の担任だけでなく、管理職や教育相談担当者にも渡し、校内のより多くの先生方にプログラムの内容を知ってもらった。

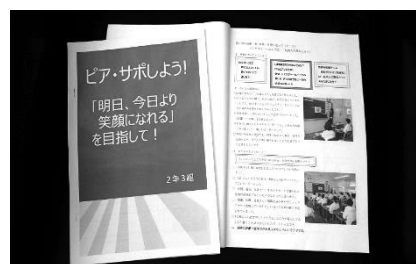


図5 授業実践のまとめ

(4) 結果

事例校では毎年5月にQ-Uを実施している。プログラム終了後の12月に再度Q-Uを実施し、承認感と学級内の人間関係の変化について検証した。また、担任へのインタビュー調査も行った。

① 学級の状態の変化（Q-Uの結果）

学級満足度尺度得点の変化（左表）と学校生活意欲得点の変化（右表）

< A組 >

	承認得点		友人との関係	教師との関係
5月	36.7	5月	17.8	15.9
12月	37.1	12月	18.1	16.8

承認得点の平均は0.4点上がった。「学校生活意欲得点」の中の「友人との関係」の平均が0.3点上がり、「教師との関係」の平均が0.9点上がった。

< B組 >

	承認得点		友人との関係	教師との関係
5月	38.5	5月	18.6	15.9
12月	40.4	12月	18.9	16.2

承認得点の平均は1.9点上がった。「学校生活意欲得点」の中の「友人との関係」の平均が0.3点上がり、「教師との関係」の平均が0.3点上がった。

② 担任へのインタビュー調査から

ア 生徒にどのような変化があったか。

- ・すぐに反論するのではなく、まずは話を聴こうとするようになった。
- ・「ありがとう」という言葉が増えた。
- ・言葉遣いに気をつけるようになった生徒がいる。

イ 先生方自身にどのような変化があったか。

- ・自分の教科の授業中に「心地よい聴き方」「3つのタイプ：ジャイアン、のび太、しずかちゃん」という言葉を使って指導するようになった。

ウ 本プログラムのどのような点がよかったか。

- ・ふだんあまり発言できない生徒も発言しやすい活動になっている。
- ・生徒の記憶に残る授業になっている。
- ・効果的なミニゲームが含まれている。

(5) 考察

授業実践に入った学級の担任は、毎回、表現力豊かに生徒にモデリングを示していた。そして生徒たちは、担任のモデリングについて、振り返り用紙に感想を書いたり授業後に担任に直接話をしに來たりするなど、担任のモデリングを毎回とても楽しみにしている様子であった。モデリングをすることが担任自身の自己開示の機会となり、生徒との関係づくりにより影響を及ぼしたと思われる。また、担任は、生徒が書いた振り返り用紙に毎回丁寧にコメントを書き入れ、その用紙を教室後方に掲示することを継続して行っていた。これらのことが、Q-Uの結果において承認得点の平均と「教師との関係」の平均が上がった一因になったと考えられる。

女子の人間関係が難しい傾向にある時期であるが、グループ活動ではメンバーに男子生徒がいることもあり、どのグループもよい雰囲気での活動ができていた。学級全体の前で意見を言うのが得意でない生徒たちも、グループの中ではしっかりと自分の意見を言えていた。生徒の振り返りには、「協力できていました。自分が思いつかないことを書いて、すごいと思いました」「みんな優しい心をもっているんだなと思いました」「みんなで意見を出し合えました」など、グループ活動に関する肯定的な感想が多く見られた。担任へのインタビュー調査から、「すぐに反論するのではなく、まずは話を聴こうとするようになった」「言葉遣いに気をつけるようになった生徒がいる」など、生徒たちの人との関わり方に良い変化が見られたことが分かる。意見を聴いてもらえることが保障された環境でのグループ活動は、Q-Uの結果において承認得点の平均と「友人との関係」の平均が上がった一因になったと考えられる。

5 学校サポートプログラム実践2年目の取組みとして（中学校）

(1) 事例校について

生徒数約300名、1学年3～4学級、特別支援学級1学級の中学校である。町内の3つの小学校から進学してくる。昨年度は、1年生1学級に所員が入り、3学期に集中的にピア・サポートトレーニングの授業を5回実施した。今年度は、「学校サポートプログラム」の実践校として、1年生全学級と2年生2学級にて授業実践を行うこととなった。

昨年度は「アクティブ・ラーニング」の研究指定、今年度は「主体的・対話的で深い学び」の研究指定を受け、全教員が「心づくり研究部」と「学びづくり研究部」の2部会に分かれて精力的に実践を積み重ねている学校である。

(2) 事例校の課題

異なる3つの小学校から進学してくる1年生が心地よい集団を形成できるよう、2年生についてはクラス替え後の学級づくりを目的として、「学校サポートプログラム」への申し込みがあった。2年生の学年主任は、活気にあふれた学級になってほしいと思っている。

(3) 実践の概要

① 入学当初の学級づくりとして（1年生での授業実践）

1学期にプログラムを月1回実践した。1学年学年会に昨年度ピア・サポートの授業を参観していた教員がいるため、所員が1つの学級に入って授業をする時間にほかの学級でも同じ授業を実施することとなった。実践したのは、「ジョハリの窓」「みんなってすごい！自分もすごい！」「心地よい聴き方について考えよう」「うわさ話への対処法」である。夏休み中に友達とのトラブルが多発しやすいことから、「うわさ話への対処法」の授業を夏休み前に実施した。1年生の学年主任へのインタビュー調査によると、「ピア・サポート以外の授業でも、教科担当がピア・サポートトレーニングの話を出して生徒に聴き方や話し方について指導している」とのことであった。

② クラス替え後の学級づくりとして（2年生での授業実践）

1学期にプログラムを月1回実践した。内容は1年生とほぼ同じとしたが、2年生には昨年度もピア・サポートの授業を受けている生徒がいるため、以下のように演習の内容を変更して実施した。

ア 「私のハート」

提示された1枚の図が何に見えるかを考える演習「みんなってすごい！自分もすごい！」を、「私のハート」という演習に変更した。「最近の私の気持ち」をハートの図に色を塗ったり絵を書き込んだりして表現し、その後、一人ひとりの図について、グループで説明、質問、コメント、リコメントをする演習である。小グループの中で伝え合うことで、自己理解や他者理解を促進し、安心して表現することができる関係性の大切さを体感することがねらいである。生徒の感想は、「今の気持ちを色で描いたりすることで、自分の分からなかった気持ちがだんだん分かってきました」「自分の気持ちを言葉や色で表すのは少し難しかったです。でも、自分と同じような気持ちをもっている友達もいて、私だけではないんだと少し安心もしました」「みんなそれぞれいろいろ考え事があって、それぞれ違った考えをもっていることが分かりました。みんなが、否定ばかりでなく受け入れてくれたから、話しやすかったです」など、自己理解や他者理解が促進されたことが伺えるものが多かった。

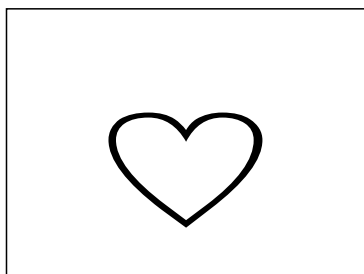


図6 「私のハート」のワークシート



図7 ワークシートへの書き込み

イ 「心地よい聴き方について考えよう」

プログラムの指導案では、「スルーする聴き方」「上から目線の聴き方」「心地よい聴き方」について所員と担任のモデリングを見た後に3人組で3つの聴き方をやってみる流れになっている。しかし、今回は「心地よい聴き方」についてはモデリングをせず、生徒自身に考えてチャレンジさせることにした。どの組も工夫をこらして意欲的に「心地よい聴き方」に取り組んでいる様子であった。その後、どのようなところから話を聴いてもらえていることが分かったかを発表してもらい、出された意見を「あいうえおの約束（あいての話を いい姿勢で うなずきながら えがおで 終わりまで聞きましよう）」を使ってT1が整理した。生徒の振り返りには、「これからの授業やグループ活動では『あいうえおの約束』を大切に聴きたいと思いました」「『あいうえおの約束』を守れば、話している人も楽しくなっているいろいろと話してくれると思うし、印象もよくなると思います」などの感想があった。「あいうえおの約束」の提示により、生徒は「心地よい聴き方」についてイメージしやすくなったようである。

(4) 結果

本プログラム担当者と担任にアンケート調査を行った。数字は人数、枠内は理由で主なもののみ取り上げる。(以下同じ)

① 本プログラムに取り組んでみてどうだったか。

大変よかった 2 まあまあよかった 1 あまりよくなかった 0 よくなかった 0

・楽しみにしている生徒も多く、学級の雰囲気も変わっていった。
 ・クラス替えをしたばかりで、仲間づくりの活動が有り難かった。
 ・ピア・サポの後は、ほんわかした雰囲気になり、授業中の話合いも良い雰囲気で進められた。

② 本プログラムは、生徒たちの人間関係づくりに役立ったか？

とても役に立った 1 まあまあ役に立った 2 あまり役に立たなかった 0 全く役に立たなかった 0

・聴き方などプログラムで行ったことを日常の学校生活で取り入れることができた。
 ・ピア・サポートからの学びのおかげか、相手に上手に人当たり良くアドバイスしたり言葉かけしたりできるようになった生徒がいる。

③ 生徒たちは、友達のいいところや頑張っているところを見付けることが多くなったか？

多くなった 2 少し多くなった 0 あまり変わらなかった 1 まったく変わらなかった 0

・友達にメッセージを送る活動が上手にできるようになった。いろいろなメッセージを送ったり良いところを短時間で見つけたりできるようになった。
 ・人権週間の取組みで、友達の良いところを書くコメントがとても良かった。

④ 生徒たちの中で、思いやり行動は増えたか？

かなり増えた 0 少し増えた 2 あまり変わらなかった 1 まったく変わらなかった 0

・友達に声をかける生徒が増えた。
 ・プログラムを行い仲良くなったことで、声かけがしやすくなったようである。

⑤ 先生方自身に変化はあったか？

変わった 1 少し変わった 2 あまり変わらなかった 0 まったく変わらなかった 0

・生徒の良い所に目を向ける機会が増えた。生徒の新しい一面を見付けることができた。
 ・相手への言葉のかけ方、聴き方について、より意識して指導するようになった。

(5) 考察

プログラム実践2年目ということで、今年度は校内にピア・サポートについて知っている教員が複数名存在する状態でのスタートとなった。1年生の担任の中にも昨年度の授業を参観していた教員がいたことで、1年生全学級で同じ時間に同じ内容の授業をスムーズに実践することができた。また、月1回の授業実践においてだけでなく、多くの教員が様々な場面でピア・サポートに関する話をしたことは、自分も相手も大切にすることを意識の向上を促進し、心地よい集団形成に有効であったと思われる。2年生については、1年次の3学期に集中的にピア・サポートの授業を実施したこともあり、生徒は授業の内容をよく覚えている様子であった。授業のねらいは変えずに演習内容をアレンジすることで、生徒は新鮮な気持ちで授業に取り組みつつ、以前に学んだ内容を再度確認することができたと思われる。アンケート調査では、「ピア・サポの後は、ほんわかした雰囲気になり、授業中の話合いも良い雰囲気で進められた」「友達にメッセージを送る活動が上手にできるようになった。いろいろなメッセージを送ったり良いところを短時間で見つけたりできるようになった」といった感想があり、プログラムはクラス替え後の学級づくりにも役立ったと思われる。

事例校は、学校教育活動全体を通して「礼の心(感謝と思いやりの心)」を育てることを目指している。ピア・サポートにも「思いやりの心」が必要不可欠である。中学校版学級経営プログラムは、ピア・サポート活動を通して、思いやりのある子どもたちを育て、思いやりのある学校風土を創造す

ることを目指している。夏休みまでの期間にピア・サポートトレーニングを実施したことは、1年生と2年生の学級づくりだけでなく「礼の心」を育てる土台づくりにおいても一定の成果を収めたと思われる。

6 若手教員サポートの取組みとして（中学校）

(1) 事例校について

生徒数約 290 名、1 学年 3～4 学級、特別支援学級 2 学級の中学校である。町内の 3 つの小学校から進学してくる。昨年度は、「学校サポートプログラム」の実践校として 1 年生 2 学級にて授業実践を行った。今年度は、サポート校として 1 年生 1 学級に所員が入り、授業実践に取り組むこととなった。担任は 2 年目の若手教員である。

(2) 事例校の課題

生徒同士が互いに認め合い助け合う風土づくりによって、不登校や登校しぶりの生徒が出ることを予防したいということで、「学校サポートプログラム」への申し込みがあった。担任は、小学校時のメンバーと現在のメンバーにあまり変化がないため、入学した時点で友達に対する固定観念ができてしまっている可能性があることを懸念している。友達に対して固定観念をもたず、話をきちんと聴くことができる生徒にしたいという思いをもっている。

(3) 実践の概要

① 月 1 回の授業実践

研究所が提案している中学校版学級経営プログラムを月 1 回実践した。

② チームティーチング（TT）による授業

TT で授業に入り、担任と所員が役割を分担して授業をすすめた。所員が T 1 として授業を主に行い、担任は T 2 として、学級全体をよく見ながら個別の生徒への対応を行った。



図 8 TT による授業

③ 道徳の授業における気づきの般化としてのピア・サポート活動

担任が 11 月の校内授業研究会にて道徳の授業を行うこととなった。研究テーマは「つながり合い学び合う集団を目指して」であり、担任は『白紙の答案用紙』という資料を用いて、班での話し合い活動を取り入れながら「充実した集団生活の実現のためには、周囲の寛容の心や協力の姿勢が必要不可欠である」ことを生徒に気付かせていった。この授業での気づきを生徒の日常生活に般化することをねらい、「この学級をよりよくするために自分ができるピア・サポート活動」のプランニング、実践、振り返りをプログラムの順序を変更し先に実施した。班で「こんなサポートがあったらいいな」というものを考える活動では、用紙に書ききれないほど多くのアイデアが出された。道徳の授業における気づきが、よりよい学級にするために自分も何かしたいという意欲につながったようである。

④ 授業の振り返りと学級経営に関する助言

夏休み中に振り返りの時間を長めに設けた。夏休みまでに実践した授業の振り返りに加え、5 月に実施された Q-U の結果の検討や、学級の「縦糸」を作る指導と「横糸」を作るしかけについて所員から助言をし、これからの学級経営について話し合った。

⑤ プログラムに関するデータの利用

年度当初の打ち合わせの際、実践学級の担任に中学校版学級経営プログラムに関するデータをまとめて渡した。データの内容は、指導案、授業の動画、教材などである。担任は、授業案やモデリングのやり方を確認するためにデータを利用し、毎回熱心に授業の準備をしていた。所員と担任が TT で授業を行った後、担任が同じ学年のほかの担任に授業内容を伝達してほかの学級でもピア・サポートの

授業が行われていたが、授業内容伝達の際にもデータが活用された。

(4) 結果

担任にアンケート調査を行った。枠内は理由で主なもののみ取り上げる。

① 本プログラムに取り組んでみてどうだったか。→大変よかった

- ・思いやりや協力することの大切さを実践的に学べた。
- ・ふだん話さない生徒にも積極的に話そうとする姿勢が見られるようになったと思う。
- ・教材、教具がそろっているので授業をしやすかった。

② 本プログラムは、生徒たちの人間関係づくりに役立ったか？→とても役に立った

- ・違う小学校から入学してきた生徒同士がコミュニケーションをとる良いきっかけになった。

③ 生徒たちは、友達のいいところや頑張っているところを見付けることが多くなったか？

→少し多くなった

- ・友達の悪いところや間違っただけを責めなくなったように感じる。

④ 生徒たちの中で、思いやり行動は増えたか？→かなり増えた

- ・ピア・サポの活動中も、日常生活の中でも、仲間同士で協力する姿勢や相手を思いやった言動が少しずつ増えた。

⑤ 先生自身に変化はあったか？→変わった

- ・授業規律、話を聞かせるときの指示、道徳の授業のレポーターが増えた。

(5) 考察

担任は、小学校時のメンバーと現在のメンバーにあまり変化がないことによる人間関係の固定化を懸念していた。しかし、年度末の担任へのアンケート調査では、「違う小学校から入学してきた生徒同士がコミュニケーションをとる良いきっかけになった」「ふだん話さない生徒にも積極的に話そうとする姿勢が見られるようになったと思う」「思いやりや協力することの大切さを実践的に学べた」との回答を得た。様々な活動を通して様々な生徒とコミュニケーションを図る機会をもてたこと、思いやりや協力することの大切さについて考える機会をもてたことが、互いに認め合い助け合う学級づくりに役立ったと思われる。「授業規律、話を聞かせるときの指示、道徳の授業のレポーターが増えた」との回答については、所員が主として授業を進めることにより、担任は自分の学級の様子をこまかく観察し、生徒への指示の出し方や声のかけ方などについてじっくり考えることができたからであると考えられる。

実践学級は学力面でもよい成果が見られた。また欠席も少なく、ほぼ毎回、全員がそろった状態で授業実践ができた。学校行事へも大変積極的に取り組んでいた。担任の若手教員が常日頃から生徒と真摯に向き合い、プログラムの実践も含め学級づくりに熱心に取り組んできたことが、これらのことにつながったと言えるであろう。

7 人間関係づくりを通じたトラブルの未然防止の取組みとして（中学校）

(1) 事例校について

生徒数約 530 名、1 学年 6 学級、特別支援学級 2 学級の中学校である。町内の 5 つの小学校から進学してくる。今年度から 2 年生で「学校サポートプログラム」を導入したいという管理職の希望があり、実践校として月 1 回 2 年生の 3 学級ずつに所員が入って授業実践を行うことになった。

(2) 事例校の課題

中学 2 年生は中だるみになりがちな学年で、毎年人間関係にまつわるトラブルが起りやすかったり、不登校になる生徒がでたりしやすいということで、今年度から毎年 2 年生で学級内の人間関係づくりを目的とした学校サポートプログラムの授業を実践することになった。学年の学校サポート担当

教員のA教諭を中心に、6学級が足並みをそろえて実践していくことになった。

(3) 実践の概要

学校サポート担当のA教諭と年度初めに打合わせをして、全体計画を立てた。1年目の取り組みということで、研究所が提案している中学校版学級経営プログラムを月1回実践していくことになった。学年全体に授業について提案するために、A教諭の学級において1回先取りで所員とTTで授業を行い、所員が入るあとの2学級は残りの5学級で順番に回していくこととなった。初年度ということで、所員がT1、担任がT2で、トレーニングの主要な部分は所員が進めることにした。A教諭が先取りで実践した授業をもとに、学年会で指導案を提案し、教材や教具を準備して学年全体で取り組んだ。

① 4月の授業参観日に全学級でオリエンテーションの授業公開

第1回の授業は、4月の授業参観日に全学級がオリエンテーションの授業「ジョハリの窓・みんなってすごい！自分もすごい！」を公開した。「ジョハリの窓」は「ほかの人と上手にコミュニケーションをとるためには何が大切か」という話であり、「みんなってすごい！自分もすごい！」は同じものを見ても人によって見え方が違うということを知る活動を通して、「人と自分は違って当然。だからこそ違いを認め合う学級を作っていこう」という内容である。学年会で協議して指導案の順序を入れ替えるなど、同じ題材を使いながらもそれぞれの担任が独自の工夫を凝らして授業を展開し、これからの学級づくりについての担任の思いを生徒たちに伝えていた。

② 月1回のピア・サポートトレーニング

第2回目の授業からは、それぞれの学級目標に向けてのよりよい学級づくりのために、学級全員がピア・サポーターになるためのトレーニングを行った。「聴き方」「気持ちの読み取り方」「気持ちの良い話し方」「上手な断り方」をA教諭の学級の授業をもとにほかの5学級が足並みをそろえて実践した。月1回の所員が入った授業を管理職はもちろん他学年の教員が多数参観し、学校全体で取り組んでいこうという高い意欲も感じられた。事例校は1人1授業をほかの先生に公開することになっており、ピア・サポートトレーニングの授業を公開したいと所員が入る授業でT1として授業を進め、公開授業につなげる担任もいた。

③ 後期指導主事訪問の学年共同参観授業として

後期指導主事訪問の学年共同参観授業として、A教諭が「悪いのだ〜れ」の授業を行うことになった。この授業は、LINEトラブルを扱ったいじめ防止をねらった授業で、2年前の研究所の研修講座で兵庫県立大学の竹内和雄准教授から紹介された授業である。「学校サポートプログラム」では、オプションとして指導案を作成し、通信研修でも取り上げている。



図9 「悪いのだ〜れ」の授業

A教諭は、「小学生の中学校見学の際に、小学生にSNSの使い方について標語でアドバイスしよう」という学習課題を提示し、LINEトラブルで被害者・加害者・傍観者のそれぞれの悪いところを話し合った上で学級全体で共有し、そのうち自分が一番悪いと思う子にアドバイスを考えた。事前授業として別の学級で実践した際には、LINEのやりとりの文言をA教諭が独自にアレンジしたため、アドバイスが被害者に集中するということがあったが、その後の研究会でそのことについて分析し、参観授業では研修講座で竹内准教授が提案したとおりに提示したところ、アドバイスが被害者・加害者・傍観者に分散し、それぞれの立場でいじめについて考えることができた。いじめ予防のポイントは、傍観者を仲裁者に変えることであり、傍観者に対するアドバイスが多く発表されたことで、生徒たちがいじめを予防するために自分たちができることについても深く考えられたように思われる。

④ プランニングから実践、振り返りへ

トレーニングの後のプランニング、実践、振り返りの授業には所員は入らず、A教諭との打合わせ

のみで、学年会でのA教諭からの提案をもとにそれぞれの担任が行った。「今の学級をさらによい学級にするために、自分ができること」をプランニングし、実践した上で振り返る活動をとおして、トレーニングをしてきたことの意味についても考えることができたようである。

⑤ 球技大会での実践

「学校サポートプログラム」にそって一通り実践した後、A教諭から学校行事に絡めてピア・サポート活動を行いたいという提案を学年の先生方や他学年の先生方に呼び掛け、2学期末の球技大会でピア・サポート活動を行うことになった。

「球技大会のチームメンバーのいいところや頑張っていたところを、体育の時間や本番に見つけて付箋に書いて渡す」という活動を企画し、「球技大会後の振り返りのときに付箋を書かせてもいいですが、体育のあった日に少しずつメモさせていくと、より効果的かもしれません。例えば『班に1つファイルを用意してワークシートを挟んでおき、体育のあった日の帰りの会で、裏面（白紙）にメモさせる』『明日学にメモさせておく』など」と、職員朝礼でワークシートや実践の手順や工夫等を全先生方に知らせ、先生方が取り組みやすいようにきめ細かに準備をしていた。

⑥ 学校全体へ活動を広げる取組み

事例校では来年度以降も2年生で学校サポートプログラムに取り組むということが決まっていることもあり、A教諭が、毎時間の授業の内容や生徒の感想、生徒同士のよかったことを認め合うコメントが掲載されている振り返りを毎月の職員会議で配布し、先生方全体に「学校サポートプログラム」の理解が深まるようにした。

(4) 結果

学年で取り組んだ2年生の先生方にアンケート調査を行った。

① 今年度、初めて本プログラムを取り入れたが、取り組んでみてどうだったか。

大変よかった6 まあまあよかった0 あまりよくなかった0 よくなかった0

- ・生徒たちが、日常生活における自分の姿を振り返るだけでなく、よりよい対人関係を築く方法を主体的に考えることができた。
- ・系統だっており、前時の振り返りから始まるので、生徒もつながりを感じながら授業を受けていたと思う。

② 本プログラムは、生徒たちの人間関係づくりに役立ったか。

とても役に立った5 まあまあ役に立った1 あまり役に立たなかった0 全く役に立たなかった0

- ・先生方が、「～ということをしてピア・サポートで学んだよね」と言うことで、生徒たちは、生徒同士どう接していけばいいのか日々の生活の中でも感じ取っていた。
- ・2年生全体が大きな争いもなく、おだやかに過ごせているのは、ピア・サポートの力が大きいと思う。また、何かトラブルがあったときも、指導が入りやすかった。

③ 生徒たちの話を聴く姿勢は変わったか。

変わった3 少し変わった3 あまり変わらなかった0 まったく変わらなかった0

- ・「心地よい聴き方」など、ピア・サポートで扱ったスキルを生徒同士で活用する姿も見られ、落ち着いた学級となった。友達の話聴けることで、人間関係も良好であった。

④ 生徒たちは、友達のいいところや頑張っているところを見付けることが多くなったか。

多くなった4 少し多くなった2 あまり変わらなかった0 まったく変わらなかった0

- ・行事ごとに、友達のよいところ探しを継続的に行ったため、自然とできるようになった。

⑤ 生徒たちの中で、思いやり行動は増えたか。

かなり増えた3 少し増えた3 あまり変わらなかった0 まったく変わらなかった0

- ・昨年と学級の生徒がかわったこともあるが、他人を思いやる行動が、特に男子で多く見られた。

(5) 考察

「学校サポートプログラム」の申し込みの際、「学年全体で取り組みたい」と希望する学校は多いものの、実際所員が入ることができる学級は限られており、それ以外の学級で継続して実践していくことは大変困難である。しかし、事例校は、担当のA教諭が率先して授業を実践し、それを踏まえて他学級に指導案を提案し、教材教具も準備して、月ごとに所員が入る学級をコーディネートするということを1年間継続して行ったことで、学年全体が足並みをそろえてプログラムを進めることができた。また、管理職の強いリーダーシップもあり、学校サポートの授業を「やってもやらなくてもよいもの」ではなく、「やらなければいけないもの」にしたということも、A教諭が実践を進めやすかった要因だと考えられる。

2年生の先生方のアンケートでは、全員の先生方が「本プログラムを取り入れてよかった」と回答し、ほぼ全員の先生方が「生徒たちの人間関係づくりに役立った」、「友達のいいところや頑張っているところを見付けることが多くなった」と感じているということで、理由にも、「よりよい対人関係を築く方法を主体的に考えることができた」、「友達のよいところを見付けることが自然とできるようになった」、「他人を思いやる行動が増えた」、というような、対人関係能力が向上したことを示すコメントがみられ、本プログラムでの実践は一定の成果を収められたと思われる。

月1回訪問すると、行事のたびに「僕・私が見つけた、頑張っていた友達」が学級ごとに廊下に掲示されていたり、他学年の先輩や後輩への一人ずつのメッセージが色画用紙に貼られていたり、毎月の授業の振り返りが教室内に掲示されていたりと、授業だけでなく日々の教育活動の中にピア・サポート的な活動が盛り込まれていることに気付かされた。これは、A教諭が中心となって学年会で生徒たちがお互いに認め合い、支え合える関係になるための活動を考え、実践しているからである。事例校に訪問するたびに、学年の雰囲気明るくなっていることを実感し、外部からの訪問者である所員にも多くの生徒が人懐っこく話しかけてくれた。このような取り組みが可能になる学年の先生方の良好な関係性や、月ごとに違う学級で授業を担当と実践する際、どの担任も所員と肯定的にかかわって下さる様子が生徒たちにとってもよいモデリングになっていること、ピア・サポートトレーニングでコミュニケーションのスキルが身につけてきていることなどで、生徒たちも自信をもっているいろいろな人と関われるようになってきているのだと思われる。これらのことは、「学校サポートプログラム」を学年全体で取り組むことが可能になるための重要な示唆を与えていると思われる。

8 国立教育政策研究所指定「魅力ある学校づくり」調査研究事業での学級づくりの取り組みとして

(中学校)

(1) 事例校について

生徒数約600名、1学年7学級、特別支援学級3学級の中学校である。町内の3つの小学校から進学してくる。昨年より事例校の所轄の教育委員会が文部科学省国立教育政策研究所の指定を受け、事例校区をモデル校として、2年間「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組むことになった。そこで、昨年度は「学校サポートプログラム」のサポート校として、1年生と2年生で「学校サポートプログラム」の授業実践に取り組んだ。

(2) 事例校の課題

近年の事例校における不登校数は年々増加の傾向にあり、他の中学校区より増加率が高い。不登校対策には、「未然防止」「初期対応」「自立支援」の3つの観点があるが、不登校生徒を増やさないためには新規の不登校を生まない「魅力ある学校」にしていくことが一番の近道と考え、そのための取り組みの一つとして「学校サポートプログラム」を取り入れて、互いに支え合い、関わり合うことで生徒たち同士の絆づくりにつなげていくことを目的として実践を重ねた。

(3) 実践の概要

① 昨年度の取組み

昨年度は、所員がTTで授業に入る形で1学期に2年生で、2学期に1年生でプログラムを実践し、現職教育も2回行った。前期の指導主事訪問では2年生の代表学級で「気持ちの良い話し方について考えよう」の授業を、後期の指導主事訪問では1年生の代表学級で「うわさ話への対処法」を共同参観授業として実施し、学年で研究会をしてピア・サポートプログラムについて理解を深めた。また、現職教育として夏季休業中にはQ-U研修会を実施する中で、学級づくりにおけるピア・サポートプログラムの有効性について所員が講義と演習を行った。秋にはピア・サポートプログラム研修会を実施し、3年生の体育大会の応援で実践したピア・サポート活動についての報告や、各学年の行事を絡めたピア・サポート活動のプランニングなどを行った。その上で事例校のカリキュラムに合わせた各学年の年間計画を立案した。

② 若手自主サークルを中心とした取組み

今年度は各学年のピア・サポート担当が中心となって取組みを進めた。また、若手自主サークルを立ち上げ、学級開きに使える演習や授業づくりなどについて長期休業中や放課後などに集まって、学び合った。このコミュニティは、教職大学院で学びながら「魅力ある学校づくり」の実践を推進している研究主任が校内の先生方に呼び掛け、ピア・サポート担当と学級づくりについて学びたいと思っている若手教員が集まって学び合う組織である。この自主サークルの勉強会には所員も参加し、それぞれのテーマについて実践に有効なピア・サポートトレーニングを紹介したり、モデリングのアイデアを出したりして共に学んだ。昨年度1年間自分の学級で実践した教員が多く参加していることもあり、各学年の行事に合わせて「上手な質問の仕方」や「聴き方」のトレーニングをアレンジするなど様々な工夫がみられた。また、モデリングのセリフも自分たちでアレンジし、ビデオに撮って学年の先生に提案するなど学年のピア・サポート担当として積極的にピア・サポート活動を推進していこうという意欲がみられた。勉強会には、新採用の教員や担任経験が浅い教員も参加しており、ベテランから中堅、若手が共に学び合っていた。

③ ピア・サポートプログラムを取り入れた道徳授業

道徳の教科化に向けて、後期指導主事訪問で3学年ともピア・サポートを取り入れた道徳授業を校区の小学校の先生方に公開することになり、各学年で、道徳の授業研究に取り組んだ。

1年生では、「ありのままの自分で生きる」という題材で、乳がん闘病中でありながら、仕事だけでなくがん啓発活動等にも積極的に取り組んでいる女性をゲストティーチャーに迎えて授業を行った。まず資料で、この女性が中学時代に友達とのトラブルや勉強で挫折したことをきっかけに保健室登校になったとき、ありのままの自分を受け入れられず「助けて」が言えなかったときの気持ちや、大人になってがんを宣告されてからありのままの自分を受け入れ周囲に「助けて」を言えたことから生き方が変わり、周囲に支えられながら幸せに生きることができるようになったのはなぜかを考えた。その後、ゲストティーチャーから、「ありのままに生きることの大切さ」の話を聴き、「自分の嫌だなど思うこと」などネガティブなことを友達に話すスキルトレーニングを行った。ネガティブな思いを友達に受け入れてもらい、感情やふんばっていることをフィードバックしてもらおうというピア・サポートトレーニングをすることで、生徒たちがどんな自分も丸ごと受け入れることの大切さに気付くことができていた。



図10 ゲストティーチャーの活用

この授業に向けて、学年全体で学級の友達のいいところを見

付ける「秘密の友達」や「困りごとを話し合う」ピア・サポート活動に取り組み、生徒同士が温かい雰囲気話し合えるようになった。この授業は、テレビや新聞に取り上げられ、保護者が家庭で道徳の授業について話し合うきっかけにもなったようである。また、学年会で実施した事前授業では、研究アドバイザーの菱田教授から、道徳授業におけるピア・サポートの有効性や体験活動としてのスキルトレーニングについての助言も得た。

3学年とも研究授業の後に小学校の先生方や福井大学教職大学院の先生方を交えて授業研究会を行い、道徳の教科化に向けて、体験活動にピア・サポートのスキル学習を取り入れることの有効性やピア・サポートプログラムと道徳の価値項目について議論を深めた。

(4) 結果

「魅力ある学校づくり」担当の2人の先生方にアンケート調査を行った。

- ① 2年間、「魅力ある学校づくり」事業の一環として、ピア・サポートプログラムを取り入れたが、取り組んでみてどうだったか。→大変良かった2

<生徒たちにとって>

- ・特に1年目は、計画されたプログラムに従って集中的に実践したことで、生徒たち同士のつながりを深めることができたと思う。生徒たちは、「ピア・サポ」の授業を楽しみにしており、それが生徒たちの居場所づくりにもつながったのだと思う。
- ・生徒たちが、つながり合うきっかけになった。コミュニケーションをとる上で何が大切かについて、生徒たちが意識するようになった。

<教員にとって>

- ・教員も生徒の話を聴くスキルがついた。
- ・「ピア・サポートプログラム」という新たな手法を学ぶことで、新たな視点に気付くことができ、特に若手教員にとって、今後の学級経営の大きな力になったと思う。

- ② ピア・サポートプログラムは、生徒たちの人間関係づくりに役立ったか。→とても役に立った2

- ・昨年の3年生は学級内でちょっとしたトラブルがあったとき「それピア・サポでやったやろ」などと生徒同士で声をかけていた。体育祭での後輩への関わり方、送る会での3年生内での絆の深まりなどに大変役立った。今年の1年生は、学級の中でどの子とも話せるようになった。先生方は、「～ということをピア・サポートで学んだよね」と言うことで、生徒たちは、生徒同士どう接していけばいいのか日々の生活の中でも感じ取っていた。

- ③ 生徒たちの中で、思いやり行動は増えたか。→少し増えた2

- ・もともと困っている友達への気づかいは多かったが、より増えた。困っている友達への声のかけ方をスキルとして身に付けられたからだと思う。

- ④ ピア・サポートプログラムを実践してみて良かった点は何か。

- ・人間関係のトラブルが起きたとき、「ピア・サポでやったよね…」と話すと納得する。トラブルを自分達で解決するようになってきた。

(5) 考察

事例校は昨年「魅力ある学校づくり」の研究指定校として、研究主任中心に学校全体で実践研究に取り組んできた。その取組みの一つとしてピア・サポートプログラムを導入し、昨年度は1年生と2年生で学級づくりのピア・サポートプログラムに取り組み、各学年のピア・サポート年間計画を作成し、今年度は各学年の担当を中心に取組みを進めてきた。

今年度は、後期指導主事訪問でピア・サポートプログラムを取り入れた道徳授業を3学年とも校区の小学校の先生方等に公開するという機会があり、公開授業に向けて授業者中心にピア・サポートプログラムを道徳授業にどのように生かしていくかという観点で、ピア・サポートに対する意識の高ま

りがあった。3学年とも9月から授業者と所員が授業づくりについて検討を重ね、それぞれの授業の中に「他者支援」というピア・サポートの観点を盛り込むことや体験活動としてスキル学習を取り入れることを中心に学年部会や道徳部会とも連携しながら授業づくりを進めていった。検討会を重ねるごとに、授業者の理解が深まり、日々の学級経営の中にピア・サポート活動を取り入れていくなど実践にもつながっていった。とりわけ昨年から事例校のピア・サポートの中心となって実践を推進してきたB教諭は、担任する学級の生徒たちの実態から、日々のスキルトレーニングやピア・サポート活動にねらいをもって取り組み、素晴らしい授業を作り上げていた。その授業の成功の陰には、毎週のように週末自主的に研究所に通い、自作資料や指導案、ゲストティーチャーの活用の仕方、有効なスキルトレーニングのさせ方など所員と何時間もかけて検討し、日々の実践に取り組み、改善を繰り返したという努力があった。また、菱田教授参観の事前授業に向けても何度も模擬授業を行い、参加した同僚の教員のアドバイスを心得て授業改善を行っていたことも、質の高い授業につながったと思われる。事前授業までに学年会でも授業研究を重ね、すべての学級でB教諭が提案したスキル学習に取り組み、それぞれの担任が自学級で授業を実践した上で菱田教授の助言を得たことも、学年全体の学びにつながったと思われる。B教諭は、ピア・サポートについて熱心に勉強しており、研究所で昨年開催した菱田教授の研修講座や今年の自主研修会に参加したり、日本ピア・サポート学会のワークショップにも自主的に参加したりして、個人の力量向上に努めている。B教諭が道徳の研究授業を学年の代表として実践したことが、学年全体の取り組みにつながったと思われる。

担当の先生方のアンケート調査からも、ピア・サポートプログラムを取り入れたことで、「生徒たち同士のつながりを深めることができた」、「子どもたちの居場所づくりにもつながった」、「生徒たちが、つながり合うきっかけになった」、「人間関係のトラブルが起きたとき、自分たちで解決するようになってきた」などの回答を得られ、不登校生徒を増やさないための取り組みの一つとして、互いに支え合い、関わり合うことで生徒同士の絆づくりにつなげることに一定の成果を収めることができたように思われる。

9 研究協力者を中心とした若手教員の学級づくりサポートの取り組みとして（中学校）

(1) 事例校について

生徒数約950名、1学年10～11学級、特別支援学級2学級の中学校である。市内の5つの小学校から進学してくる。事例校は、2年間学級経営研究ユニットの研究協力校として、3学級ずつピア・サポートプログラムの授業実践を行ってきた中学校である。1年生から同じ3人の担任の学級で実践したが、1年目は同じプログラムを月1回、2年目は、同じプログラムを1学級で月1回、2学級では3か月間で集中的に実践した。

(2) 事例校の課題

2年間の実践研究に中心となって取り組んだ中堅の女性教員が今年度も研究協力者として、自分の学級でピア・サポートプログラムを実践しながら、若手教員の学級づくりのサポートも行った。事例校に限らず県内の中学校では50代と20代の教員が多数を占め、30～40歳代の中堅が少なく、若手教員のサポートが課題となっている。

(3) 実践の概要

3年生の担任をしている研究協力者が、2年生を担当している2人の若手教員の学級づくりのサポートを行った。

① 研究協力者について

研究協力者のC教諭は、事例校勤務5年目、30代の中堅教員である。道徳主任も経験し、授業づくりや学級づくりに熱心に取り組んでいる。ピア・サポートプログラムには、2年間事例校の中心となって取り組み、「福井県版学級経営プログラム」の作成に尽力した。また、ピア・サポート学会のワ

ークショップにも進んで参加し、実践力を向上させてきた。2年間、研究協力者として所員と共に実践を行ってきたが、今年度は、所員はアドバイザーとして関わり、C教諭が2年間の実践をもとに、学級づくりに有効なピア・サポートの授業を紹介し、自学級での授業実践を2人の教員が参観して、実際にそれぞれ担任する学級で授業を実践するという形で実践を進めていくことにした。

② 合唱コンクールに向けてのピア・サポートの取り組み

C教諭の2年間の実践の中で、トレーニングしたスキルを生かせる場として行事に絡めてピア・サポート活動を実践することがより有効だという実感が得られ、今年度は行事に絡めて実践することになった。

まずは、合唱コンクールに向けて研究協力者の学級で話し合った。現時点での学級の「絆得点」をつけてみたところ、60点から70点をつける生徒が多く、平均65点だった。「合唱コンクールでどうなったら花丸か」と問いかけてみると、「金賞だけが花丸ではない」などの意見が出され、話し合いの末、「合唱コンクールで学級が今よりさらにまとまったら花丸」ということになった。そのために「自分たちは何ができるか」を考えて、シェアさせたところ、「一生懸命練習する」とか「まじめに取り組む」というような漠然としたものではなく、「アルトのパートリーダーとして、ラジカセを準備して練習を引っ張る」などの具体的な行動のプランが出てきた。その上で3～4人のグループでそのプランにした理由、心配なことなどを話し合い、メンバー同士でアドバイスをするという活動を行った。全体でシェアリングをして、担任から「具体的なサポートを考えただけ、そのサポートを実際に行うには手立てが必要だよ」と問いかけると、生徒たちの中から「合唱コンクールに向けてみんなの気持ちを一つにするために、普段の授業で『聴く』、『話す』ことを意識していきたい」との意見が出されるなど、自分たちで何とかしたいという気持ちの高まりがみられた。

この時間の振り返りには、「自分だけが合唱コンクールに対して不安に思っていると思っていたけど、みんなも不安に思っていると知って安心した」、「不安な気持ちを言葉にしてみんなに伝えたことで楽になった」などの記述があり、この1時間の活動で合唱コンクールに向けての意欲の高まりを担当として感じ取ったということだった。2人の若手教員もこの授業を参観し、ピア・サポート活動の必要性を生徒たちから引き出す授業展開を学んだ。

③ 合唱コンクールの振り返り

合唱コンクール終了後、振り返りをした。絆得点は平均120点になり、「学級の中で頑張った」という振り返りが多く出された。その後グループでシェアリングし、「どういうところがよかったのか」を確認した。さらに、C教諭から「実際のあなたの行動で花丸になれた？」と生徒たちに問いかけ、グループで話し合わせたところ、ある生徒から「個人としては練習のときにふざけてしまい、申し訳なかった」などの振り返りが出たので、学級全体に紹介したところ、ほかにもそのような気持ちをもっている生徒が数名おり、「残り半年、さらによい学級を目指して成長できるよね」と投げかけ、合唱コンクールの振り返りをもとに「さらによい学級になるために必要な力」をグループで話し合わせた。生徒たちからは、「聴く力」「伝える力」「考えたことを実際に行動する力」などが挙げられたが、ある生徒から「それぞれの立場から出た意見だけど、全員ができるようにならないと意味がないのでは？」という意見が出され、みんなで伸ばしたい力として「聴く力」「人の話を素直に受け止める力」「伝える力」の3つの力を確認した。

④ 「聴く」トレーニング

合唱コンクールの振り返りで生徒たちから出された「聴く力」をつけるためのトレーニングの授業を行った。生徒たちのほとんどは、2年間で「聴き方」の授業を受けていることもあり、この授業は、C教諭が学会のワークショップで学んだトレーニングの方法で授業を進めた。まず、モデリングなしで「えらそうな聞き方」を生徒たちにさせて、感想を話し合わせた。その後、生徒たちが「心地よい聴き方」で友達の話をお聴き活動させたところ、「心地よい聴き方で聴いてもらおうと、話し手が楽し

く話せた」、「聴いている自分もちゃんと聴こうとすると話が面白く聴ける」などの感想が発表され、「相手を見て、うなずきながら、最後まで聴くという聴き方がやっぱり大事」ということを学級全体で確認することができた。

授業を参観した若手教員からは、「トレーニングを進めていくにつれて学級の雰囲気やわらかくなっていった」、「ワークシートの感想を、活動をしっかり振り返りながら書いていたので自分の学級にも取り入れたい」という感想が得られた。

⑤ 所員を交えてのカンファレンス

今年度は、所員はC教諭と実践の進め方について打合わせを行い、C教諭が校内で2人の若手教員と話し合いながら実践を進めていたが、1度所員も入り4人でカンファレンスをすることにした。

若手教員からは、学校祭が終わってから3年生に向けて「ありがとうカード」を書き、掲示物にして届けた実践や、学級内の友達の頑張っていることやいいなあとと思っていることを伝えあう「秘密の友達」の実践、C教諭の実践を自分の学級にアレンジして取り入れた実践などの報告があった。

また、若手教員から「学年のピア・サポート担当として学年全体にピア・サポートプログラムを広げないといけないが、うまく広げられていない」という相談があった。所員からは、「まずはできることから実践していき、じわじわと取組みを広げていくことが大事」「ほかの先生方が、『いい取り組みだなあ』『自分の学級でもやってみたい』と思って相談されたら実践を紹介してサポートしていくことができればよいのでは」とアドバイスしたところ、C教諭の実践を参考に球技大会でピア・サポート活動を実践したり、新人戦の振り返りで「部活動のメンバーの一員として自分ができること」を考えさせて活動につなげさせていったりしたいという意見が出された。また、「仲間のよいところ探し」として継続して取り組んでいる「ありがとうカード」についても、生徒たちに職場体験後に書くことを伝え、これまでより意識して取り組みたいということだった。

⑥ 課題解決スキルの授業実践

C教諭は、事例校で2回目の3年生担任であり、1回目の担任のときの進路指導で課題に感じたことがあり、今年度はその課題を克服したいという思いがあった。その一つが生徒たちの受験に向かううえでのストレスマネジメントであり、今年度はピア・サポート学会のワークショップで学んだ「課題解決5つのステップ」の授業実践に取り組むことにした。



図 11 研究協力者と若手教員によるモデリング

合唱コンクールの取り組みの振り返りから、「自分だけでなくほかの人もストレスを感じている、やらないといけないと思っているけどできないと共有できたことで楽になった」「同じように受験勉強でも悩みや不安を共有することで楽になれるのではないか」という意見が出され、学力診断テストに向けてピア・サポート活動を行っていくことを確認した。

まず、学診1週間前に「学診が近づいてきたけど、日々の生活で困っていることを話し合おう」ということで、「困りごとリスト」を各自で記入した。これは、困っていることをリストに記入し、困り度を10点満点で数値化するもので、困っていることを書くことで外在化し、数値化することでスケールアップできるものである。生徒たちは自分が書いた困りごとの中から1つ選び、4人グループで話し、隣の人がその話を繰り返す、その隣の人が「不安なんだね」と感情でフィードバックをし、その隣の人が「そんな中でもふんばっていること」をフィードバックする活動である。この活動で不安を語ることで、「不安なのは自分だけじゃない」「みんな同じような不安を抱えていると知って楽になった」という振り返りがあり、学診前の不安が軽減されたようである。その上で、「学診に向けて困っていることを解決するためにどうしたらいいか」を「課題解決5つのステップ」を使ってグループで話し合わせた。

学診後、「学診前行動計画を振り返り、これからの行動計画を立てよう」という授業を、菱田教授 参観授業として行った。まず、学診に向けての行動で「うまくいったこと」「うまくいかなかったこと」を出し合い、グループでシェアリングしてから全体で共有した。次に、「うまくいかなかったこと」をグループで共有したが、その際、事例校の若手教員3人の協力を得て、「困りごとリスト」でやった繰り返し・感情のフィードバック、ふんばっていることのフィードバックのモデリングをした。その後メンバー全員の「うまくいかなかったこと」を共有した上で、「解決したい課題」を選び、全体で発表した。課題としては、「勉強に集中できず、誘惑に負けた」「休憩と勉強の切り替えがうまくいかなかった」「教科の時間配分がうまくいかなかった」などが挙げられた。その上で、「課題解決5つのステップ」で話し合い、「今後の行動計画」まで決め、全体で共有した。生徒たちからは、「図書館へ行き集中して勉強する」、「長引く休憩はせず、タイマーを使う」などの行動計画が出された。

授業後、菱田教授、事例校の先生方、研究所の学校サポートプログラムメンバーで研究協議を行い、授業やピア・サポートプログラムの進め方について話し合った。菱田教授からは、「グループでAさんの課題について考えるとき、課題を掘り下げ深く聞き取ることが必要。そのうえで、Aさんの課題についてみんながサポーターとして考えるという意識をもつ。そして、振り返りのときにAさんにも考えてもらった友達に対して話をさせることで、支えてもらった側も支えた側も自己有用感が育まれる」、「教師が『ほかの先生方のサポートを得ながら授業を進め、最後にいろんな先生に助けられて頑張っている』という話をしたことで、生徒たちが『先生も助けられてやっているんだ』というメッセージが伝わったのがよかった」などの助言を得た。また、授業にモデリングで参加した若手教員からは、「学級の生徒たちの仲を深めるために、「話す」「聴く」時間を意識的に作ることで大事だと感じた」、「教師が自己開示して生徒たちに語りかけることで、教師と生徒たちの距離が縮まることを実感した。」「授業だけでなく、日々の生活の中で教師が生徒たちにとってのロールモデルとなるのだと、これまでの授業参観を通じて学んだので、自分も学級の生徒たちのモデルになるように日々の学級経営で意識していきたい」という感想を得た。

(4) 結果

研究協力者のC教諭と若手教員にアンケート調査を行った。

< C教諭の回答 >

① 今年度、若手教員サポートの一環としてピア・サポートプログラムに取り組んでどうだったか。

- ・生徒たちは、若い先生方が参考のための授業で見に来て下さると、ほどよい緊張感とお手本になっているという喜びをもって積極的に授業に参加していた。
- ・この学級にとってピア・サポートが必然的になるようどうもっていけばよいかを考えながら日々の学級経営ができるようになった。自分も人との関わり方を学ぶ機会となった。

② 学校サポートプログラムの実施により3人の先生方の意識や協働性は高まったか。

- ・授業を見に来てくれたり、ロールプレイのモデルとして協力してくれたりすることで、意識が高まったように思う。生徒にも、先生たちが協力している姿を見せるきっかけとなりよかった。そういうやりとりの中で、若手教員の2人とは日常の会話も増えた。

< 若手教員の回答 >

① 今年度、ピア・サポートプログラムに取り組んでどうだったか。

- ・良かった。秘密の友達を行うことで、学級の雰囲気はよくなった。
- ・生徒たちの人間関係づくりに役立ち学級全体が仲良くなった。教員と生徒の関係が良くなった。

② 生徒たちは、友達のいいところや頑張っているところを見付けることが多くなったか。

- ・多くなった。生活ノートに自分から学級やクラスメイトのいいところを書く生徒も出てきた。

③ 自分の学級経営力や授業力の向上に役立ったか。

・かなり役立った。授業でもペアやグループで話し合う機会を増やし、授業が活性化してきた。

(5) 考察

今年度は、所員は昨年まで研究協力者だったC教諭のアドバイザーとして実践についての相談にのる形で関わり、授業実践には参加しなかったが、菱田教授参観の課題解決の授業だけ参観した。学級の生徒は過去2年間にピア・サポートの授業で所員も関わった生徒がほとんどで、内容が盛りだくさんの授業だったが、どの活動にも生徒たちが主体的に取り組み、終始和やかな雰囲気の中で授業が進んだ。このことは、やはり継続することの有効性を示していると考えられる。

C教諭とのカンファレンスの中で、「授業で活動をする際、以前やったことのある生徒が初めての生徒にアドバイスしたり活動を率先して進めたりする姿が見られ、1年目より2年目、2年目より3年目の方がスムーズに授業を進められた」との感想を得られた。また、行事のたびに「絆得点」を意識し、「今の学級がさらにより良い学級になって絆得点を上げるために自分ができることをプランニングする」ということを継続したことで、行事を通して生徒同士がお互いの違いや良さを認め合い、支え合って、自分たちの学級をよりよい学級にしていこうという意識が高まったように思われる。このような取り組みが可能になったのは、C教諭が自主的にピア・サポート学会のワークショップに繰り返し参加し、ピア・サポートの理念について自分なりに理解し、実践力を高めたことで、目の前の生徒たちに必要な力を授業を通して付けることができたのだと思われる。「学校サポートプログラム」にそって、2年間実践したことで、ワークショップで学んだことを自分なりにアレンジしながら授業に落とし込むことができ、「課題解決スキル」の授業や数々の実践につなげていけたように思われる。

今年度は若手教員の学級づくりのサポートということで実践を進めていたが、C教諭が同じ学校で、自分が授業を見せながら若手教員の授業実践をサポートしていたこと、定期的なカンファレンスで学級づくりや授業づくりについての悩みを聴きながら有効な手立てを示していたこと、研究所で開催された菱田教授の自主研修会に若手教員と一緒に参加しピア・サポートについて理解を深めるような場を提供したことなどを通して、しっかりサポートしていたように思われる。アンケート調査からも、若手教員の学級経営力向上に効果があっただけでなく、授業実践を見せることが自分の学級経営力の向上につながり、生徒たちにとっても望ましい効果があったこと、一緒に取り組んだ教員間の協働性が高まり、日常的にも相談しやすい関係になったことなどが成果として挙げられる。

10 「音楽でピア・サポート」～授業や学校行事を活かした学級づくりの取り組みとして～（中学校）

(1) 事例校について

生徒数約390名、1学年4～5学級、特別支援学級2学級の中学校である。町内の4つの小学校から進学してくる。昨年度は学校サポートプログラムの実践校として、1年生と2年生の若手教員が担任する3学級でピア・サポートプログラムの授業実践に取り組んだ。

(2) 事例校の課題

近年増加している若手教員に対して、30代から40代のミドルの年代の教員が少なく、従来校内でベテラン教員や中堅から受け継がれてきた学級経営や生徒指導の技術の継承が難しくなっている。事例校のような中規模校では、一人ひとりの教員が担当する校務分掌も多く、若手教員がじっくり学級経営について学ぶ時間をとることが難しい。さらに、新卒新採用でいきなり担任をもつことも珍しくなくなり、十分な研修や講師としての現場経験がないまま、多くの課題に直面せざるを得ない状況になっている。

(3) 実践の概要

① 昨年度の取り組み

昨年度は、20代の若手教員3人の学級に所員がTTで授業に入った。「学校サポートプログラム」の

プログラムにそって、1か月に1回、担任がT2で導入と振り返り、所員がT1でトレーニングの時間を担当し、授業を進めた。授業の日の放課後に、3人の教員と所員で振り返りと次時の打合わせの時間をとり、適宜学級づくりについてのミニ講義を入れたり、気がかりな生徒についての相談にのったりした。また、授業には管理職をはじめ、それぞれの学年主任や学年の先生方も参観し、学校・学年全体で若手教員をサポートしていこうという雰囲気が感じられた。1年間、月1回一緒に授業実践を行ったり、振り返りの時間をもったりできたことで、それぞれの先生方が力量を向上させることにつながったと思われる。

② 教育相談担当（音楽）を中心とした取り組み

今年度、小学校から異動してきた中堅教員のD教諭が教育相談担当になり、事例校のピア・サポートを推進していくことになった。学年所属は1年生で、1学期は初任者が担任することになった学級に所員がTTで授業に入り、ほかの学級はD教諭がTTで授業実践を行うことになった。所員が入った授業をビデオで撮影したり、たくさんの先生方が参観したりしていて、昨年度に比べてピア・サポートプログラムに対する意識の向上を実感した。

前期指導主事訪問では、高校から異動してきて初めて中学校の担任をすることになった4年目の若手教員が、「聴き方」のトレーニングを取り入れた道徳の授業を共同参観授業として行うことになった。この授業では、D教諭がTTで入り、「友達の話をしっかり聴くことで、相手も『受け入れてもらえた』『大切に思ってもらっている』と思えるよね。そのことがピア・サポートなんだよ」ということを生徒たちに伝えた。この授業に向けて、学年会で指導案を検討したり、事前授業を実施したりした。学年の先生方も授業づくりに熱心に参加し、若手教員と一緒に道徳の授業づくりに取り組んでいた。共同参観授業では、生徒たちが生き生きとトレーニング取り組み、学級の友達と温かい雰囲気で聴き合う姿が見られた。

③ 合唱コンクールを生かしたピア・サポート活動の取り組み

ア 若手教員の自主勉強会

2学期は多くの学校行事があるが、D教諭は中でも、合唱コンクールを学級づくりに生かしたピア・サポート活動をプランニングした。D教諭は全学級の音楽を担当しており、授業の中でもピア・サポートトレーニングを実施しやすいこと、合唱コンクールは学級づくりのとてもよい機会になること、若手教員が行事に向けた学級づくりについて学ぶよい機会になることなどがその理由である。

まず、D教諭が若手教員を集めて「合唱コンクールに向けた学級づくり」についての自主勉強会を開催した。6人の若手教員と講師が参加し、所員も参加して現在学級で困っていることや合唱コンクールに向けての取り組みの現状などについて話し合った。昨年度ピア・サポートを学級で実践した教員も2人参加していて、今の困っている状況をピア・サポートの視点で改善していきたいという意欲も感じられた。学級で困っていることとしては、「気がかりな生徒の対応」、「男女の仲が良くない」「生徒同士をどう関わらせてよいかわからない」「不登校の生徒に対する学級の生徒の関わらせ方に戸惑っている」などが出された。所員から、「合唱コンクールへの取り組みを通して、学級の生徒が互いの違いや、それぞれのもつ良さを認め合い、助け合って一つのものでつくり上げる経験ができるので、担任にとっては学級づくりの絶好のチャンスである」ということを伝え、それぞれの困りごとについて解決策を話し合った。若手教員でも学年も経験年数もバラバラだったこともあり、さまざまな観点からアドバイスがあり、とても有意義な勉強会になったように思う。D教諭からも、音楽の授業での生徒の様子が報告され、生徒理解も深まったようだった。参加した若手教員からは、後日、「ほめることが大事だということを知ったので、肯定的に生徒を見るようになり、タイミングを考えてほめることを意識できるようになった」、「1学期からピア・サポートの授業を継続してやってきたので、合唱コンクールに向けた取組みも、生徒たちが自分たちで進めていこうという姿勢がみられた」などの感想を得た。

また、生徒に配布する予定のプランニングのワークシートを提案し、学級担任と教科担任が連携して取り組んでいくことを確認した。その後、音楽の時間に合唱コンクールに向けて生徒たちが自分ができることをプランニングした。生徒たちのプランニングでは、「伴奏者として、みんなが歌いやすいようにピアノを弾く」、「パートリーダーとして、誰よりも大きな声で歌ってみんなを引っ張りたい」というものがあった。

イ 後期指導主事訪問の研究授業

後期指導主事訪問の研究授業でD教諭が、初任者が担任する学級で「ピア・サポートを取り入れた音楽の授業」を公開した。この授業に向けて、研究所の音楽担当の所員が事前研究会に参加し、一緒に指導案検討を行った。授業の冒頭で、「和音ジャンケン」をしてアイスブレイクをした後、毎時間取り組んでいる「秘密の友達」のくじを引き、この時間、どの友達の「がんばっているところやいいところ」を見付けるかを決めた。「合唱コンクールの課題曲をハー



図12 パートごとの話し合い

モニーを意識して作り上げる」ことをめあてに、パートごとに「どのようなことに気を付けて歌うとよりよいハーモニーをつくり上げることができるか」を話し合って付箋で楽譜に貼っていき、その楽譜を見ながらパート練習に取り組んだ。ピア・サポートトレーニングを1学期に実践していることもあって、友達同士の意見をよく聴き合ったり「その意見いいね！」などの声を掛け合ったりする様子が見られ、とても温かい雰囲気の中でパートごとの話し合いや練習が進められていた。その後全体でパートごとに考えた工夫を発表した上で練習したパートを発表し合った。自分たちで考えた工夫を意識して歌う様子が見られ、意欲的に歌う姿勢が見て取れた。最後に全体で歌った後、自分たちが本時の授業で見つけた「秘密の友達」のいいところと振り返りをワークシートに記入していた。「秘密の友達」のいいところとして、「〇〇さんの歌う表情が楽しそうでよかった」、「〇〇さんが進んでCDの準備や後片付けをしてくれていた」などの記述があり、振り返りには、「パートリーダーが、しっかり練習で意識するところを言ってくれたので助かった」、「同じパートの友達が、大きな声で歌ってくれたので、自分も安心して歌うことができた」等の記述があった。

ピア・サポートの授業の振り返りの際に「仲間のよいところ探し」を継続して行ってきたことや、音楽の授業に「秘密の友達」を取り入れたことにより、生徒同士が互いを認め合うことができるようになっており、学級に親和的な雰囲気が醸成されてきていることを感じた。また、このような雰囲気が醸成されることによって、生徒たちは安心して活動に取り組むことができ、結果として行事に積極的に向き合うようになってきていることも実感した。

ウ 学年でのプレ合唱コンクール

合唱コンクール本番前に、それまでの練習の成果を確認し、生徒たちが「さらにより合唱にするために自分たちにどのようなことができるか」を考えさせるために、プレ合唱コンクールを開催した。1年生にとっては体育館で合唱を披露する初めての経験で、緊張する様子も見られたが、それまでの練習の成果をしっかりと発揮していた。ゲストティーチャーとして研究所の音楽担当の所員も参加し、全体へのミニレクチャーと学級ごとの一言アドバイスをした上で、ミニレッスンをを行った。合唱の専門家の指導ということで、生徒たちも意欲的に取り組む様子が見られ、本番に向けてよい機会になった。このプレ合唱コンクールでの自分たちの合唱とミニレッスンをふまえて、本番に向けて担任が中心となって練習に取り組んだ。担任にとっても、ほかの学級と自分の学級を比較して、生徒たちへの声掛けを工夫するよい機会となったようで、D教諭にも授業の様子を聞きに来て、生徒たちに肯定的なアドバイスをかけようとしている担任も増えたということだった。

また、このプレ合唱コンクールの後に「本番に向けて自分たちに何ができるか」を考えたプランニ

ングでは、ある病気で学校を休んでいる生徒がいる学級で、「合唱コンクールで一緒に歌えない分、自分たちが一生懸命歌って最高の合唱にして、元気になってもらう」ということをプランニングした生徒が複数いて、道徳の時間や音楽の時間に学級全体に紹介したところ、その後歌声がかわり、担任も「まさにピア・サポートだね」と生徒たちに話したということだった。

エ 合唱コンクール本番

合唱コンクール本番では、所員と研究所の音楽担当の所員が、審査員として参加した。どの学級も練習の成果を発揮して素晴らしい歌声を響かせていた。研究授業で自分たちで工夫してよりよいハーモニーをつくり上げようとしていた学級の合唱では、それぞれのパートで意識して歌っている様子がかがえた。自主勉強会に参加し、気がかりな生徒について相談していた担任の学級では、その生徒が学級の中でも際立って一生懸命歌っており、「〇〇さん、一生懸命歌っていましたね」と担任に伝えたと、担任もとてもうれしそうに「そうなんです」と答えてくれた。病気のため参加できなかった生徒がいる学級は、友達に思いを届ける気持ちがこもった合唱を披露し、見事最優秀賞を獲得した。

合唱コンクールの後の振り返りでは、「賞をとることより、みんなで協力して歌えたことがうれしかった」、「合唱コンクールを通して学級が一つになり、団結力が高まった」などの記述があった。担任からも、「指揮者や伴奏者、それぞれのパートのメンバーが、学級全体のために自分の役割を果たし、自分たちなりに精一杯取り組むことができていた」という感想を得た。学校行事は担任にとって大変なことも多いが、学級づくりにおいては大きな役割を果たしていることを実感した。

(4) 結果

学年で取り組んだ1年生の先生方にアンケート調査を行った。

- ① 今年度、1年生でピア・サポートプログラムを取り入れたが、取り組んでみてどうだったか。
 大変よかった4 まあまあよかった1 あまりよくなかった0 よくなかった0

- ・学級が落ち着き、自分の言葉に気をつけている生徒が増えたと思う。
- ・学級で大きないじめなどがおきなかったのは、プログラムの効果が大きかったと思う。
- ・ソーシャルスキルを学ぶことで学級が落ち着いた。関係づくりに役立つと感じた。
- ・生徒の社会性やコミュニケーション能力が高まった。また、そうした方法を自分が学ぶことができた。

- ② ピア・サポートプログラムは、生徒たちの人間関係づくりに役立ったか。
 とても役に立った3 まあまあ役に立った3 あまり役に立たなかった0 全く役に立たなかった0

- ・ソーシャルスキルを身につけることで、苦手な子や今まで仲良くなかった子ともコミュニケーションをとれていると思う。
- ・笑顔が増え、楽しみながら人間関係の作り方を学べたと思う。

- ③ 生徒たちは、友達のいいところや頑張っているところを見付けることが多くなったか。
 多くなった2 少し多くなった1 あまり変わらなかった1 まったく変わらなかった0

- ・学校祭の後、友達のよかったところを全員分書させる活動をしたところ、全員が静かに取り組んでいた。

- ④ 生徒たちの中で、思いやり行動は増えたか。
 かなり増えた2 少し増えた3 あまり変わらなかった0 まったく変わらなかった0

- ・教えてあげたり、助けてあげたりする場面が増えたと思う。
- ・給食準備などの場面で率先して手伝う生徒が増えた。

(5) 考察

昨年度から「若手教員の力量形成のサポート」として事例校に入っており、学級に入ってからかかわった教員の力量形成にはつながったものの、学級での取り組みだけになってしまい、学年全体や学校全

体の取り組みに広げることができなかった。3人の教員からは、「ほかの学級はやっていないので、校内でピア・サポートの進め方について相談できない」という悩みや、授業の打ち合わせや授業準備、振り返りなどに時間をとられてしまうことから多少なりとも負担感を感じていたと思われる。

今年度は、中堅教員のD教諭が教育相談担当として、校内の若手教員に呼び掛け、音楽担当として、合唱コンクールや卒業式などの行事を絡めて学級づくりや学年づくりにピア・サポートプログラムを導入したことで、学年全体で取り組むことが可能となった。D教諭は、教育相談や音楽の授業を担当していることで、それぞれの学級の実態を把握しやすく、学級の状態や気がかりな生徒についての情報交換も担任としやすいことで、スムーズに連携できたように思われる。また、若手教員の相談にのることも多く、自主勉強会にも自分から積極的に参加する若手教員が多かった。担任にとって合唱コンクールという行事を使って学級づくりにピア・サポート活動を取り入れたことで、自分の学級経営に新たな視点をもてたことや、同じようなことに悩む教員同士で困っていることを共有し、解決策を話し合えたことも有意義だったように思われる。

D教諭は、教育相談担当ということで、不登校生徒についての相談やケース会議などで所員と密に連携できていたことも、今年度の実践がスムーズに進んだ大きな要因である。自主勉強会に所員が参加して学級経営について研修を担当している立場からアドバイスができたことで、基本研修で学んだことと同じ内容を実践に落とし込むヒントになったり、研究所の音楽担当の所員もゲストティーチャーとして実践に参加したことで、専門的な指導を生徒たちが受けることができ、意識の高まりがみられたりした。また、D教諭はピア・サポート学会のワークショップに進んで参加し、自分が事例校の生徒たちのためにできることを学び、プランニングするなど実践力を高める努力を続けている。このような高い意欲と学び続ける姿勢が、今年度の事例校の実践研究を大きく進める原動力になったように思われる。

1年生の先生方のアンケート調査からは、ほぼ全員の先生方が、学年でピア・サポートプログラムに取り組んだことが、「大変良かった」と答えており、特に若手教員が「生徒の社会性やコミュニケーション能力が高まった。また、そうした方法を自分が学ぶことができた」、「学級で大きいじめなどがおきなかったのは、プログラムの効果が大きかったと思う」「学級が落ち着き、自分の言葉に気をつけている生徒が増えたと思う」と回答していることなどから、若手教員の学級経営力を向上させる取り組みとして、一定の成果を収められたように思う。また、2年間の取り組みから、若手教員育成のためには、所員が個別にサポートに入るよりも、学校の中堅教員や学年集団と連携して取り組む方が効果的であり、生徒たちにとっても望ましい方向であると思われた。

Ⅲ 研究の総括と今後の方向性

「教師個人と教師集団の高い力量が優れた実践を生む」（栗原 2017）ということは当然のことながら、これまであまり重視されてこなかったように思われる。しかし、現在学校が直面している数多くの課題を解決していくためには、学校現場において、個々の教師の専門性と教師集団のチーム性を高めていくことが重要である。学級経営プログラムの中心であるピア・サポートプログラムは、「よい個が育つ集団を育てる」アプローチである包括的生徒指導理論に依拠している。よって、それぞれの学校の課題に応える形でこのプログラムを柔軟に提供することで、教師の意識を高め、力量形成にも寄与できると考え実践を積み重ねた。

今年度は、実践校を小・中学校それぞれ4校にして募集し決定した。申し込みがあったものの実践校として訪問できない学校についてはサポート校として学校のニーズに応じて授業や現職教育などの支援を行った。実践事例に挙げたように、若手教員育成や人間関係づくり、行事と関連させた取り組みについてのサポートとしては、Q-Uなどの結果や教員へのアンケート調査から一定の成果を収め、本プログ

ラムを今後さまざまな学級集団に応じて有効に機能させる足がかりは得られたように思われる。しかし、本ユニットの取り組みとしては浅く広くの支援になってしまい、学校の課題解決のための支援として中途半端なものとなってしまった。また、実践校についても、事前の打合わせで課題解決を目的とした実施計画を立てて実践することができなかった学校もあり、中途半端な支援になってしまった感は否めない。そのようになってしまった理由として、実践の積み上げがなく見通しがもてなかったこと、所員の経験が浅く、十分に学校を支援するだけの力量が不足していたこと、プログラムの目的や指導方法などを学校側に伝えきれていなかったことの3つが挙げられる。

以上の課題をうけて、今後の方向性として次の3つの改善策を挙げる。1つ目は、今年度の実践事例をもとに、本プログラムを活用することで学校の課題が解決していけるというアセスメントができた学校について集中的に訪問するということである。そのためには、事前の学校からの聞き取りを丁寧に行うことが不可欠である。その上で、実践校を絞って実践研究を行い、今後活用できる実践事例にしていきたい。2つ目は、本プログラムを有効に活用するために必要な研修を学校に提供していくということである。「Q-Uの見方」や「学級づくり」、「SST」、「ピア・サポートプログラム」など従来行ってきた訪問研修を実践校に必要なに応じて複数回提供することで、先生方の実践についての理解が深まり、より効果的な支援につながると考える。また、今年度、年度途中に学級の困難さから本プログラムを導入したいとの希望があり、支援を行った学校が数校あった。不登校やいじめなどの問題については、対症療法的な指導よりも未然防止のための指導を行っていくことが大切であるという視点を学校に伝え、そのような目的で本プログラムの活用を勧めていくことが効果的であると考えられる。3つ目は、所員の力量向上である。今年度はユニットの所員の2人が初めて実践するという一方で、学校の課題解決のために支援するという面では不十分な点があった。ユニットの所員の力量向上に努め、より効果的な学校支援をしていけるようにしていきたい。

また、今年度の実践研究では、3年間実践している昨年までの研究協力校や昨年から継続している学校で、それまでの実践の省察を繰り返すことで新たな実践が生まれた。生徒たちにとってより効果的な実践になったことで、学校支援、教師支援がより実効性のあるものになったことが成果として挙げられる。このような成果を挙げられた要因として、各学校の実践の中心となった中核教員の新しい学びへの高い意欲と実践力、校内のほかの教員に実践を広げていくことができるコーディネーター力が挙げられる。教師集団の年齢構成の変化への対応が求められる今、このような中核教員の学びを支え、それぞれの学校の課題に教員一丸となって対応していける自力解決力を育むサポートをしていくことがこれからの教育相談センターには求められる。菱田教授が研修会で繰り返し指摘する、「実践者の数だけピア・サポートプログラムの数はある。目の前の子どもたちに必要なプログラムを構築した上で、失敗を恐れずチャレンジし、実践を検証して次に生かすことが大切。その先に、子どもたちや先生方の幸せがある。」という言葉が今後の「学校サポートプログラム」活用の方向性を示唆している。今後、本プログラムを福井県の学校の課題解決のためにさらに有効なプログラムにしていけるよう実践を重ねていきたい。

最後に、本実践事例作成のためにご協力いただいた小・中学校の先生方、ご指導いただいた立命館大学教職大学院の菱田準子教授にこの場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

《引用文献》

○栗原慎二編著(2017)『マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり』p.8 ほんの森出版

《参考文献》

○栗原慎二・井上弥編著(2015)『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版

○森川澄男/監修 菱田準子/著(2002)『すぐ始められるピア・サポート指導案&シート集』ほんの森出版